

六甲カトリック教会報

2006.7 No.415

7月のお知らせ

		教会暦	教会行事
2	日	年間第 13 主日	10 : 15 壮年会例会
3	月	聖トマ使徒	
7	金		初金 7 : 00 10 : 00 ミサ (婦人会例会)
9	日	年間第 14 主日	10 : 15 小教区評議会
11	火	聖ベネディクト修道院長	
15	土	聖ボナベントゥラ司教教会博士	14 : 30 教会学校終業式
16	日	年間第 15 主日	9 : 30 住吉教会との合同ミサ (住吉教会にて)
20	木		14 : 00 ベタニアの集い
22	土	聖マリア (マグダラ)	
23	日	年間第 16 主日	
24	月		11 : 00 ベビーとママの集い
25	火	聖ヤコブ使徒	
26	水	聖マリアの両親 聖ヨアキムと聖アンナ	
29	土	聖マルタ	
30	日	年間第 17 主日	13 : 30 「イグナチオの霊性」講演会 (結城神父)
31	月	聖イグナチオ (ロヨラ) 司祭	イエズス会創立者 聖イグナチオ 450 年記念日

注 : 7月16日(日) 当教会での9:00のミサはありません。

中高生とそのご父兄のみなさまへ

7月に入り、子供達は夏休みを楽しみにしていると思います。中高生はその前に期末試験がありますが、その試練を乗り越えて、楽しい夏休みを過ごすことができます。私も7月の休暇を楽しみにしています。今年、教区の司祭の兄が、司祭職50年の「金祝」をお祝いします。家族が集まって、その方の金祝と私の75歳の誕生日を祝います。

家族の絆はいいものですね。何と素晴らしいことでしょう。昔を思い出してみますと、信仰の面でとても恵まれた育ちでした。8人兄弟で、経済的に困ったこともありましたが、信仰の面では本当に豊かでした。家の各部屋の壁には十字架とマリア様の御影がかけられていました。母親の監督のもとで、祈りました。特別に宗教くさい雰囲気ではなく、私達兄弟は信仰深い親から、自然に神さまとの親しい交わりを学びました。8年間小教区付属の小学校へ通い、毎日祈りで学校が始まり、

毎日宗教の時間がありました。ほとんどの先生がシスターでした。若い助任司祭達もよく話しに来られて、シスター達とともに、子供と遊びました。今のアメリカではちょっと考えられない雰囲気でした。

今年4月から、私は中高生会と関わってきました。現代の子供達は、昔とは全く違う社会に生きています。キリスト教系学校に通っていても、宗教的雰囲気はそれほどないと思います。宗教に無関心な社会が子供たちを取り巻いています。それでも、日曜日には教会に来て、集まりに参加する中高生がいます。この子供達を見ると本当に感心いたします。1年間の計画を立て、献身的に子供達を励ましてる中高生会のリーダー達にもとても感謝しています。

しかし、信仰生活にとって一番大切な場所は、

家庭です。家庭の中に宗教的雰囲気があれば、教会で学んだことは子供達の心には残りません。信仰は恵みですが、共同体の中に育っていくものです。まずは、家族の共同体からです。親から信仰を学んで、神さまとの親しい交わりを味わっていくのです。次に大切な共同体が教会です。イエスさまが共同体を築いたのは、私達が互いに励ましあうためです。まずミサに共に与ることが、励ましあうこととなります。また、同じ世代の人が集まって、共にみことばを分かち合い、互いの問題を話し合うことは大きな励ましとなります。そのために中高生会があります。

小教区の中高生の名簿を見て、驚きました。たくさんの中高生がいるにもかかわらず、集まりに参加しているのはごくわずかです。非常に残念です。今年の中1生が多く、みんな元気な仲間です。ご父兄のご協力があったこそと、心から感謝して

おります。中高生ひとりひとりに手紙を送ろうと思っていましたが、年齢のためか、なかなか実現できません。そのかわりに、この場を借りて、中高生ひとりひとりをお願いします。

中高生のみなさん、ぜひ中高生会の活動に参加して、イエス様と皆さんとの交わりを深めるようにしましょう。どうしても難しければ、洗礼によってキリストに結ばれた者として、自分なりにイエス様との交わり深めて下さい。わたしが喜んで、ひとりひとりの相談にのります。ご父兄のみなさまにもお願いいたします。ぜひ家庭で子供と一緒に祈って、信仰生活について分かち合うようにして下さい。では、楽しい夏にしましょう。イエス様とともに、中高生会に関わる司祭として、ご父兄と、ひとりひとりの子供のために祈ります。

オマリー神父

各 部 会 だ よ り

☞ 壮年会

7/2(日) 10:15～ 例会
安芸神父による「スペイン巡礼みやげ話」

☞ 婦人会

1) 7月例会のお知らせ
7/7(金)初金ミサ後 11:15～
お話・パンパン神父様
6月末に帰国され8月末までザビエルハウスに滞在されます。2年間の研修のお話や、これからの予定などお話し下さいませ。
カレー当番・中4・5
2) 例会後トップ会 13:30～15:00
信徒奉仕職の勉強と掃除募集について。欠席の方は、代理をお願い致します。
3) 7月の聖堂掃除当番
8日(土)教会学校(子供とリーダー)
14日(金)中1・2
21日(金)中3・4
28日(金)中5・東1
7日(金)の当番はありません。8日以外は9時からです。

6月9日の遠足に多数ご参加いただき、ありがとうございました。

☞ 三日月会

<例会> 7・8月はお休みです。

☞ 青年会

<定例会>
7/9(日)12:30～14:00 第3会議室
内容：福音書を読んで分かち合い
7/23(日)12:30～14:00 第3会議室
内容：「みんなで担う信徒奉仕職」を読んで分かち合い
和かな雰囲気の中で分かち合いをしています。初めての方もお気軽にご参加下さい。

☞ 行事部

納涼の夕べ第2回実行委員会：
7/16(日)13:30～第4会議室にて

☞ 社会活動部

7/7(金) 13:00～(婦人会例会後)社会活動部連絡会 於：第2会議室
大事なお相談事が沢山あります。各関係者は必ずご出席を御願致します。興味をお持ちの方も是非覗いてみて下さい。社会活動部では、お一人お一人の積極的な“手”と“思い”を待ち望んで居ります。

聖堂屋上防水及び空調改修工事費のために特別献金をお願いいたします。

評議会議長 鈴木 肇

六甲教会では信徒会館が築後35年、聖堂が11年経過しており、幸い今までは大きな補修がありませんでしたが、昨年小聖堂で雨漏りがあり、大聖堂も何時大きな雨漏りが起こるか分からない状況です。小聖堂と多目的ホールの空調の不具合は油漏れが原因で、それが屋上防水機能を損じる恐れがあり、防水工事と併せて2機更新を要することになりました。

先の信徒総会で施設管理部より改修工事の必要性が説明されその予算が承認されました。

以後、一級建築士やビル管理の専門家が施工業者と仔細に検討してきましたが、最終的に1,850万円の見積が出ました。建物は一般的に築後30年の間に新築の7割程度の維持管理費が必要と言われています。そのために教会会計では、毎年積み立てを行いイエズス会の本部に預けてありますが、これは将来の信徒会館改築などの大改修に使う予定のものです。この度の出費ではそれを取り崩さずに教区への納付金の減額などで、今年度の収入の範囲内で賄いたいと考えました。しかし通常の収入だけでは財政維持が困難な状態です。

そこで信徒のみなさまに自由で寛大な特別献金を以下のとおりお願いいたしたく存じます。ふだんから教会の維持にはいろいろなご負担をお掛けしておりますが、自分たちの教会はじぶんたちで大切に守ってゆきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

なお工事期間は暖冷房が不要な時期として10月から11月を予定しています。

ご負担いただく金額は、それぞれのご家庭のご事情にお任せし、千円からでも結構ですが、目標は700万円、維持費をご負担の一世帯あたり平均一万円とお考え下されば大変ありがたく存じます。

募集期間は7月15日(土)から9月17日(日)までとします。
途中、週報などで中間報告いたします。

献金方法は、ごミサの時に封筒を用意いたしますのでそれに入れて維持費の函にお入れ下さい。ご記名は自由です、公表は致しません。
領収書が必要な方は、その旨を記入したメモを同封して下さい。

【養成部からのお知らせ】

平和旬間

- 8月12日 イエズス会川村神父による講演
「ザビエルの去ったあと」
- 8月13日 合同礼拝
- 8月26日 聖書朗読リレー
エゼキエルの預言を中心に。

【社会活動部からのお知らせ】

7/5(水) 10:00~ 手芸の集い(於:第1,2会議室)

小物作り。手作りのお好きな方、何方でもご参加下さい。

7/7(金) 神戸の冬を支える会・一斉夜回り(19:00神戸中央教会集合)

中央、明石、須磨あわせての一斉夜回りが予定されています。19時に神戸中央教会に集合、オリエンテーションの後、活動を開始致します。六甲教会からの参加者は毎回とても少ないです。夜分のことにてお出掛け難いとは存じますが、多くの皆様のご参加、ご協力を御願い致します。

7/8(土) 10:00~ 炊き出し(於:教会台所)

教会台所で準備し、用意の出来次第、小野浜公園に移動いたします。多くの方々のご協力を宜しく御願い致します。

7/9(日) 10:00~ 手作りコーナー(於:イグナチオホール)

毎回好評のお弁当、手作り食品ほかの販売を致します。是非ホールにお立ち寄り下さい。

7/20(木) 14:00~ ベタニアの集い(聖体拝領式と懇親会)

追ってご案内させていただきます。暑い時ですが、元気なお姿にお会い出来ます事を、スタッフ一同楽しみにお待ちしております。

7/28(金) 14:00~ おにぎり作り(於:教会台所)

須磨方面夜回り支援の為に作ります。ご協力を御願い致します。

【典礼部からのお知らせ】

7/30(日) 13:30~ 聖イグナチオ・デ・ロヨラ記念講演(大聖堂)

結城了悟神父様をお迎えし、「聖イグナチオ・デ・ロヨラの霊性・生き方等について」講演会を開きます。15:30より茶話会を予定しています。

【行事部からのお知らせ】

8/19(土) 17:00 ミサ後 納涼の夕べ “夏だ、祭りだ、みんなが主役”

青年会：由利光彦氏を実行委員長として、第一回実行委員会を各会代表者に集まっていたいただき、6月11日に行いました。今年も音楽を主体にした楽しいイベントになりそうです。地域の人々との交流の場として、ご近所の人をお誘いの上ご参加ください。

「東灘区」合同地区会（10・11・12地区）

5月27日(土)六甲学院にて地区会を開催いたしました。参加人数は11名でした。

私達の地区は年2回、春と秋に集会を持っております。今回、お天気は予報では雨になっていたのですが、風は少しあるものの、良いお天気に恵まれ、赤松神父様の司式により、新緑の中で野外ミサにあずかることができました。

ミサの後は、お庭で神父様にも参加していただき、各自、地区会のあり方について思っていることを話し合い、意見を交換しあうことが出来ました。自然の中でミサにあずかり、自然の中で話し合い、お食事をするひとときを持てたことは幸せでした。参加してみれば、きっと心に残るものがあると思いますので、皆様の参加をお待ちしております。
(世話人 小西弘子)

・ ・ ・ ・ ・

「御影山手地区」地区会

さる6月17日11時頃より六甲学院修道院でおこなった。まず野外聖堂で赤松神父によるミサがあり、後にお話をうかがった。真の人間として生きるとは、イエスに倣って生きることであると。例えば、貧しさを愛して生きることであると、カルメル会の小さな花のテレジアの生き方を例に話された。後、集会室で赤松神父ご自身のギター伴奏による歌（夜明けの歌等）を聞いた。歌のあとの和やかな気分に導かれて、お弁当を食べながら、自己紹介をかねて各自一言喋った。有意義な良き半日であった。
(小松原千里)

📖 図書紹介

ヘルマン・ヘッセ「人は成熟するにつれて若くなる」

V・ミヒェルス編 / 岡田朝雄訳
草思社

ヘルマン・ヘッセと言えば、私にとっては学生時代を象徴する作家名であった。卒業後数十年、その名前はほとんど目にすることなく、今ではその頃読んだ本の一冊も家には残っていない。

そろそろ定年も近くなって、老後をどのように過ごそうかという思いが頭をよぎるある日曜日、教会の2階の図書室の棚に、ヘルマン・ヘッセという名前を発見した。「人は成熟するにつれて若くなる」というその本のタイトルに、一気に惹き付けられて、さっそく貸し出してもらった。

その文章は新鮮であった。学生時代にはこの作者の何に感銘を受けていたのか、今ではさだかではない。ヘッセという作家像は、彼の作品の主人公のように、不安と希望を象徴する若者の姿と重なっていた。考えてみれば、ヘッセは1962年膨大な数の作品を残して、85歳で亡くなっている。私が「車輪の下に」や「ダミアン」を読んでいたころ、彼はすでに“老人になること”、“死を迎えること”への深い思索を重ね、多くの詩やエッセイに書き残していたことになる。

「人は成熟するにつれて若くなる」は、1995年、ヘッセの研究者であるV・ミヒェルスによって編集出版された遺稿集で、そのタイトルも編者があとにつけたものである。その解説によると、ヘッセの人生の大半は、その高い知性と精神的強さのゆえに、内面的葛藤と外部からの危険の脅威との戦いにさらされたものであった。晩年になって、戦争も終わり、ノーベル文学賞をはじめ、数々の榮譽を受けて世界に受け入れられて後も、市民権を得た亡命先のスイスの田舎で、美しい湖の見える地に住み、畑を耕しながら、思索と創作の日々を過ごした。この本は、その頃の作品が多くを占めているものと思われる。

もしも、神様が願いを聞き入れてくださるならば、私もそのような田舎の美しい自然の中で、畑を耕しながら、ヘルマン・ヘッセの数え切れない作品を年代を追って、読んでみたいと願っている。
(木下典子)

2006年第一回祈りの道場

6月3日は、朝から美しく晴れ上がって吹き渡る風もやさしく、穏やかな空気は呼吸するだけで心洗われるような一日でした。

英 隆一朗神父様指導の下、15分の講義のあと45分間の黙想。この間食事の時間を含めて一切沈黙が守られ、静かで充実した時間を過ごすことができました。私たちの祈りが努力だけでは深められず、聖霊の働きや導きの欠かせないことを、使徒言行録を中心に旧約との対比も交えて大変わかりやすく解説していただきました。30名の予定に対し43名の方が参加下さり、食事のスペースが狭くなってご迷惑をおかけしたことをこの場を借りてお詫び申し上げます。 (養成部 山本)

祈りの道場に参加して

聖霊が律法か？振り返ってみると、聖霊には程遠く、義務感や他人との比較、決まりだけによって行動をしている場面があります。聖書の言葉を借りれば、まさに律法に従った生活です。今回のキーワードの一つに「聖霊は小さくされた者と共にいる」があると思います。信仰の自由がない国の人々が、集まり祈る所に聖霊の働きを強く感じる、と聞きました。私もまずは無条件にこの生を受けたことへの感謝の喜びを持ち、何よりも大切な聖霊の働きを祈り求めていきたいと思いました。指導して下さった英神父様、企画運営して頂いた養成部の皆様ありがとうございました。 (山内 隆)

・ ・ ・ ・ ・

婦人会遠足

梅雨入りした翌日6月9日、桜井神父様が作って下さった“てるてる坊主”のお蔭でしょうか、“晴れ男”のオマリー神父様が一緒くださったお蔭でしょうか、心配された雨も前日の予報より早く上がり、神父様4名、シスター6名を含む総勢84名、2台のバスに満杯で教会を出発しました。

緑の美しい車窓の景色を楽しみつつ、今日の目的地、ドラマ「功名が辻」でハイライトを浴びている彦根、長浜の説明を聞くうちに、彦根教会に到着。

庭内のルルドのマリア様をお訪ねした後、バレンタイン神父様、彦根教会のバルス神父様の共同司式で、落ち着いた温かい雰囲気を感じられる教会でミサが行われました。高速道路が少々渋滞し、予定の時間がオーバーしていたため、彦根教会の皆様と交流時間が持てなかったのは残念でした。

次いで昼食処、エクシブ琵琶湖へ。夫々お好みに応じて飲茶がイタリアンバイキングをいただき、満腹のうちに、次の目的地、長浜へ。まち歩きマップを片手に三々五々、古い町並みの中、黒壁ガラス館、大通寺などを見て回りました。

帰りのバスでは、“なぞなぞ”で大いに盛り上がり、桜井神父様による“なぞなぞ(?)”も楽しく更に盛り上げていただきました。安芸神父様、オマリー神父様の「今日一日を無事過ごせたこと、親睦が深まったことに感謝」のお祈りのうちに、教会に到着しました。 (婦人会 梅原 明子)

待つ人の来ぬ間でで虫渡り終へ

里美

晴れ女みて緑雨止む滋賀の旅

淑

山々のみどり映せる植田かな 雅子

びわの湖^{えり}鯛場の残り走り梅雨 千鶴

古町の奥の名刹若楓 恭子

麦秋が近江平野を色どりぬ 恭子

雲低き近江富士裾麦の秋 美代子

買物も旅の楽しみ風薫る 和子

先の教会報でご案内いたしました桜井神父著「母の遺言」が神戸新聞(2006/4/30 読書欄・ひょうご選書)と図書新聞(2006/5/6)でも取り扱われました。すでにお読みの方も多いとは思いますが、まだお読みでない方のためにも、図書新聞の掲載記事(全文)をここにご紹介いたします。

「信」を抱くことの切実さ、真摯さの深さ

～ 母親の厳しい視線の先にある優しさ ～

著者は、熱心な仏教徒の家庭に生まれながら十三歳の時、六甲学院入学を契機にカトリックに出会い、十五歳の時、受洗している。大学卒業後、一般企業に就職。二十八歳の時に退社し、司祭職を目指すためイエズス会へ入会し、以来、キリスト者の道を歩み、現在、神戸カトリック六甲教会主任司祭の職にある。ここ数年、「信仰心について幾つかつづつて」きた短文を纏めたものが、本書である。

著者の父は浄土真宗、母は日蓮宗という仏教徒でありながらも、キリスト教へ皈依していく息子をどうみていたのだろうかということが、さしあたって本書を前にしてわたし(たち)が思うことになるはずだ。書名と同じ表題の文章が本書の巻頭に置かれている。ここでは、著者の母が、信仰というかたちに対して理解ある姿勢を示していたことが綴られている。

会社を辞め、司祭職を目指すため家を離れることになった時、「一度決めた以上、どんなにつらいことがあっても、帰ってきてほしくはない。本物になることだけを願っている。」と厳しく述べる母の言葉を、「親子の自然な情に打ち勝とうとしている複雑な心境で」あったとしながら、次のように記述していく。

「母は熱心な仏教徒で、キリスト教のことはほとんど知りませんでした。しかし、司祭職については、宗家という点で、出家僧から割り出して理解していたようです。」

「いったい、本物とは何でしょうか？わたしは、この問いを一生の宿題として課せられたように思います。古希に近づいたころの母の心情には、何か本物があるように、わたしの目には映っていました。」

亡き母のことを語る著者には、なんの衒いもなく、率直な敬慕の念が漂っている。それにしても、思う。著者の母の厳しい視線の先にある寛容ある優しさは、母であることの愛情の深さと同時に、「信」を持っている強さであるといつてもいいかもしれない。

つくづく、「信」を抱くことの切実さ、真摯さの深さについて本書を読みながら思った。わたしは、ここであえて、「信仰」とはいわずに、「信」としておきたい。著者は当然のことながら「信仰」という言葉を記述していく。わたしの考えでは、本物ということは、ただひとこと「信」ということで括れる“幅の広さ”(もっと別様にいえば、本書の最後に置かれた「山上から町を眺めて」にあるような俯瞰視線といつてもいい)をさすことではないのかと、思う。人と人の関係における「信」、もちろん、親に対する、あるいは子に対する「信」も含む、さらには、社会と織り成す「信」、これらは宗教性やイデオロギーを超えた、イノセンスな心性を表わす言葉としてあるはずだと、わたしはいつてみたい。

高浜虚子を引き、芭蕉を愛唱し、良寛に好感を寄せる著者の文章群を、わたしには率直な「信」についての語りとして理解しながら読むことができたといつてもいい。

「わたしたち一人ひとりの人生も、自然の木々に似た日々の積み重ねと年々の積み重ねのうちに過ぎてきました。」(「年輪を刻みながら」)

「わたし自身は歳のせい、人生の喜びや悲しみを歌い上げる演歌を聞くと、目頭が熱くなります。『浜辺の歌』や『月の砂漠』を口ずさみ夜空の星を見上げると、小さな一個の人間が宇宙の片すみに生きていることがたまたま不思議になってきます。」(「冬来りなば、春遠からじ」)

「しかしながら、生きとし生けるものは、みないつかかならずこの世界を離れるということもわかっています。旅人のように人生をとおり過ぎていくのです。」(「三度目の誕生に向けて」)

これらの文章の断片を、年齢を刻んだものの達観した見方だと、見做すことはできない。確かに、なにかに憤ったり、不満をぶついたり、熱くなったりということが、青春期にあることの証明であつたり、生きていることの手応えであつたとしても、それは、時として自分だけの領野に拘泥して、視線を押し込めてしまうことになることを理解すべきなのだ。たえず、自分の立ち位置を見直す作業を組み入れること、つまり著者の言葉でいえば、「本物」とは何かと問い続けるという姿勢こそが、イノセンスな「信」のありかただと、わたしは思う。

黒川類(評論家) 図書新聞 2006年5月6日(土)より

<p>教会報月8月号の発行は、7月30日(日)です。 編集会議は7月23日(日)です。 記事原稿は、7月16日(日)正午までに信徒会館事務室へ ご提出願います。 (広報部)</p> <p>http://www.rokko-catholic.jp</p>	<p>六 甲 カ ト リ ッ ク 教 会</p> <p>〒657-0061 神戸市灘区赤松町3-1-21</p> <p>電 話 078-851-2846</p> <p>発行責任者 桜井彦孝神父</p> <p>編 集 広 報 部</p>
--	---